

経済学の再生に取り組み 世界の経済学者

この一月、アメリカの経済学の各分野の研究者が集まる最大の学会年次総会がサンディエゴで開かれ参加した。学会のシンポジウムでは、サマーズ、クルーグマン、ルーカスなどの著名な学者たちが、アメリカやユーロの財政や金融、雇用問題について活発な議論を交わしていた。その背景には、グローバルな経済危機の発生に、伝統的な経済政策の効力が失われていることがある。既存の近代経済学が十分に機能しなかったという反省のもとに、問題の解決に役に立つ新しい経済学が必要であるとの議論だ。そもそも経済学は現実の貧困や雇用問題を解決する政策科学として発展してきた。今こそ現実の問題に対処できる経済学が必要であるとの強い経済学者たちの意思を感じることができた。

高齢化と労働力減少の下、長い低迷にある日本経済については、そのデフレや膨大な財政赤字の問題も含めて、先進国経済の先頭を走る経験をしていると認識され、これを分析し、そこから新たな理論を打ち立てる重要性が語られていた。

そこで今回は、経済学や経営学が社会科学として社会の問題の解決にどの

ように役に立つのかを考えるのにふさわしい、わかりやすく書かれた良書二冊を選んでみた。

経済学者たちは貧困問題の解決にこう取り組んできた

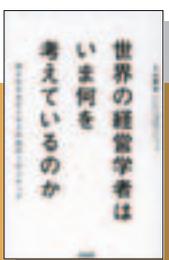
①はゲーム理論のジョン・ナッシュの自伝でベスト・セラーとなったビューティフル・マインドの著者で、コロンビア大学ビジネスジャーナリズム教授のナサール氏による経済学の歴史の概説書だ。今から二〇〇年前、チャールズ・ディケンズの時代のロンドンで貧困問題を解決するためにはじまった経済学者の取り組みの歴史を、さまざまな挿話を交えて物語風に興味深く描く。当時世界の最先進国で、さまざまな経済問題を他に先んじて経験した英国からは、ジェボンズ、ウェップ、マーシャル、マルクス等の経済学が生まれた。その後ケインズやハイエク、シュンペンターと経済学は発展し、英国からアメリカや世界の経済問題へと展開し、サミュエルソン、フリードマン、センと途上国経済の問題にまで関心が広がる。この政策科学としての経済学の発展とそこで格闘する経済学者たちのドラマを著者は展開する。世界が新たな政策科学としての経済学を求めている今、この本を手に取り、もう一度先人の努力をたどってみる意味は大きい。

アメリカの経営学の最先端の動向

②の著者入山氏は、ピッツバーグ大学で経営学博士号を取得し、ニューヨーク大学バッフアロー校ビジネススクールの教員になったばかりの新進の研究者である。世界をリードする経営学研究の最先端の動向を、一流のジャーナルに掲載された優れた論文を紹介しながら、わかりやすく解説する。著者は、日本でありがたく奉られるドラッカーやハーバード・ビジネスレビューの論文は、経営学の研究者からは科学的な研究とはみなされていないとする一方で、量的なデータを駆使したアメリカ流の研究にも限界があることを指摘する。アメリカではすっかりした研究を一流のジャーナルに発表しないと、ビジネススクールの正教授にはなれない。経営学という学問分野の先端では、どのように競争が行われ、それが科学としての経営学の確立にどう寄与しているのか。読者は、この非常によく調べて書かれた本を読むことで、さまざまなことを学ぶことができるだろう。努力した研究の裏付けがなければ、ビジネス教育もできない。日本で経営学といわれるものには、単なる経験談であったり、根拠もなく大胆に自己の意見を主張するものが散見される。それは科学としての経営学とは言い難いものなのだ。



① **Grand Pursuit:**
The Story of Economic Genius
Sylvia Nasar
Simon & Shuster, 2011



② **世界の経営学者は 今何を考えているのか：**
知られざるビジネスの知のフロンティア
入山章榮
英治出版
2012年11月